

《論説》

大東亜戦争の埋れた遺産（一）

柳 原 太 郎

一

小稿を草するに当り、その動機となった論文が二つある。ひとつは、題名からも察せられるように、上山春平「大東亜戦争の遺産」である。上山は、あの戦争を「太平洋戦争」と呼ばずに、あえて「大東亜戦争」と称した理由を「あくまでもそれを戦ったこちら側の集団の一員として反省しなかったというにつきる。」と、まず論議に当たったの視座を確かめる。そして、小稿も、その立場を踏習する。上山は、さらに、われわれは「大東亜戦争」史観、「太平洋戦争」史観、「帝国主義戦争」史観、「抗日戦争」史観といったさまざまな解釈を国民的な規模において学んできた。あの戦争を、これほど立体的に、これほど多角的な角度から反省する機会をもった国民がほかにあるうか。」とその意味を敷衍する。ところで、「大東亜戦争」史観をはじめ、戦後の関係各国のその後の動向を見ると、それらは何れも「普遍的価値尺度」を自称しておったのであるが、実は、それらの相対的価値尺度としての国家利益を倫理的に偽装する「虚偽意識」としての性格を持つ政治イデオロギーであった。国家的利益が相対的価値尺度として主張しうるのであれば、

それは、戦争に訴えるのではなくて、それと他の諸国の国家利益と多角的な共存の方策を追求しなければならない。そして、そのための政治指標としてわが国には、第二次大戦の象徴として、原爆ドームと新憲法（第九条）とがあり、そののもつ意味と由来とを検討することにより、不戦国家の理念が構築されなければならない。

もう一つは、吉田満「青年は何のために戦ったか」（吉田満著作集、下巻、所収）と題する小論文である。吉田は、まず「太平洋戦争が昭和五十年の方向を決定づけ、その時代の歴史としての帰趨の死命を制した事件であったことは、疑いをいれぬ事実である。しかし戦後三十年をへた今、この戦争が日本人にとって何を意味したかという課題は、まだ解かれていない。解かれていないどころか、正面から問われてさえないと私は考える。」との問いを提起することからはじめる。そして、この問いは、この小稿でも何ほどか意識される。

吉田は、太平洋戦争を戦った青年たちが書き残した手記、遺書、手紙を手がかりに、彼らが何ゆえに戦争協力を拒否せず、何を目的として戦斗行為に殉じようとしたかを解明することによって、この問いに接近することを試みる。

選ばれた手記等は、全部で十四に及ぶが、その殆んどが、学徒兵か、特攻隊員か、その両者であるかによつたものである。そして吉田は、その内容を二つに要約する。第一、あたえられた現実を達観しようとする態度。「学徒は真理の使徒である。学徒の愛国は国家の真実を護ること。学徒の魂は真実のない国家よりも国家のない真実を求める。」第一線で戦っている将兵が、ここまで書き残すにはよほどの勇氣が必要である。第二、厭戦の情をおもてにあらわす態度。これを書き残すにも勇氣が必要であらう。しかし厭戦は、反戦の芽となりえても反戦とは異なる。反戦とは意志であり、行動である。その本質は、国家権力そのものに対する敵対行為である。したがって反戦行為は、国家権力により規制され処罰の対象となる。これが反戦を文字の形で残すことが少ない理由であらう。

「真の反戦は、戦争の性格や平和の条件の判断をこえて、絶対平和の立場に立つものでなければならない。正義の戦

争ならば支持し、不義の戦争には反対するという立場が過去も現在も有力であり、第二次世界大戦の骨格も、正義の側に立つ連合国の当然の勝利として捉える見方が大勢であったが、戦後史の三十年は、この見方の正当性を裏付けていない。」そして頭初の設問がまだ解かれていないという事実も、戦後史のこのような混迷にもつながっているのではないかと筆を進める。

戦時中、上山は、海軍の回天特攻隊員であった。この潜水艇は、一度出撃すれば、再び帰還することはできない。吉田は、水上特攻隊の戦艦「大和」の電測士。徳之島沖で艦は轟沈、九死に一生を得て奇跡的に生還した。上山が非武装による不戦国家を称え、吉田は絶対平和による反戦を訴える。一見、甘い結論と思われるかも知れないが、そこに至る道程は、息苦しくなるくらい厳しい。戦争中の体験の然らしむところであろうか。とくに吉田の場合、そのうちにカトリックの信仰が裏付けされているのであろうか。

以上、大東亜戦争で「戦った側」「戦わされた側」の戦後の思考を、上山、吉田両氏の所論によってみたのであるが、しからば「戦わせた側」についてはどうであろうか。吉田の小論文のなかにも「兵士の一人一人は、天皇の名において、天皇の名を借りた権力によって、あまりにも多くのものを強いられた。」なる一節がある。小稿では、まず、それを大東亜戦争の開戦から殆どその期間中、総理の座にあった東條英機についてみることにする。この場合、標題中に「埋れた」なるひとことを挿入したが、これは、何か新しい事実を発見でもしたという意味ではない。精々「余り問題にされなかった」とか、当時は大きく取り上げられたが「今は忘脚された」程度のものであることを最初に断っておきたい。

二

靖国神社では、東京裁判で刑死した、いわゆるA級戦犯十四人を昭和五十三年十月十七日、合祀することに踏み切った。合祀の通常の手続の前提となる「いわゆるA級戦犯」の祭神名票が厚生省引揚援護局から靖国神社に送付されてきたのは、昭和四十一年二月八日であり、昭和四十六年の崇敬者総代会で合祀の了承もすでに得ていた。この間、BC級の内地刑死・獄死者、第三国人死没者などの合祀は、そのつど行ってきたが、A級については、取り扱いの慎重を期して昭和五十三年まで延期してきた。

ところで、ここに至るまでの経緯について後の論旨とも若干関係があるので述べておきたい。まず、講和条約発行之後のいわゆる戦犯の取り扱いについてである。昭和二十七年四月二十八日発効の対日講和条約第十一条は、次のように規定している。

日本国は、極東国際軍事裁判所並びに日本国内及び国外の他の連合国戦争犯罪法廷の裁判を受諾し、且つ、日本国内で拘禁されている日本国民にこれらの法廷が課した刑を執行するものとする。これらの拘禁されている者を赦免し、減刑し、及び仮出獄させる権限は、各事件について刑を課した一又は二以上の政府の決定及び日本国の勧告に基づく場合の外、行使することができない。極東国際軍事裁判所が刑を宣言した者については、この権限は、裁判所に代表者を出した政府の過半数の決定及び日本国の勧告に基づく場合の外、行使することができない。

これより先、GHQは、死刑宣告を受けたいわゆるA級戦犯七人の刑執行の翌日（昭和二十三年七月二十四日）、巣鴨刑務所におお拘留中のA級容疑者十九人の釈放を決定、これによりいわゆるA級戦犯の裁判は、終了する旨宣言した。（ただ、東京裁判で中華民国代表の梅汝璈裁判官が一九四八年（昭和二十三年）十二月二十七日（終了宣言があつ

てから三日目)、中国共産党にくら替えし(中華人民共和国の建国は、その翌年)、いわゆるA級戦犯釈放に不満の意を表し、これら十九人は、中国での戦犯行為を問われているのであるから中国に引き渡すべき、と主張した。(清瀬一郎「秘録東京裁判」一九三頁)

ところで、BC級で有罪判決を受けた者は、国外だけでも四千三百七十人、うち死刑九百三十七人、終身刑三百三十五人、有期刑三千九十八人で、しかもこれらの裁判は、どちらかというと報復的裁判ともいえるべきもので、裁判らしい裁判は受けずに有罪となったケースが多かった。そのようなこともあり、昭和二十七年六月七日、日本弁護士連合会が「戦犯の赦免勧告に関する意見書」を政府に送ったのを皮切りに、戦犯釈放運動は、地方自治体を含め全国的に広がった。こうした釈放運動は、政府、国会を動かし、政府は、独立後初めての終戦記念日を控えた八月上旬、まずBC級戦犯を、さらに十月下旬立太子礼の前に、いわゆるA級戦犯を含むすべての戦犯の赦免勧告を関係各国に行った。その結果、関係各国の同意を得、A級は、昭和三十一年三月三十一日までに、BC級は、昭和三十三年五月三十日を以って全員出所した(江頭淳等編「靖国論集」一一二―一一三頁)。

これとは別に、昭和五十年頃から、日本遺族会を中心に関係の靖国神社への公式参拝運動が展開された。この問題に対し、政府は、昭和五十五年、政府の統一見解として、公式参拝が「合憲か違憲か」ということは、憲法第二十条第三項の規定をめぐり、いろいろな考え方があり、政府としては違憲とも合憲とも断定していないが、このような参拝が違憲ではないかとの疑いをお否定できない。」として、公式参拝は差し控えるとの態度をとってきた。そこで、何とか遺族会の要望に答えるべく、また当時の中曽根総理の指示もあり、政府は、昭和五十九年八月三日、内閣官房長官の私的諮問機関「関係の靖国神社参拝問題に関する懇談会」をつくり、一年にわたり検討した結果「靖国神社の本殿又は社頭において一礼する方式で参拝することは、同項の規定に違反する疑いはないとの断定に至った。」この懇談

会の報告を受けて、戦後四十年に当たる昭和六十年八月十五日、中曽根総理は、天下晴れて公式参拝を行った。なお、同懇談会は、その目的外ではあつたが、合祀の対象となる「国事に殉じた人々」の範囲について「極東国際軍事裁判においていわゆるA級戦犯とされている人々が合祀されていることなどには問題がある」との委員の意見もあつたが、「政府は、公式参拝を実施する場合、これらの点は依然問題として残るものであることに留意すべきであろう。」と一応の注意を促すに止めている（ジュリスト「靖国神社公式参拝」特集、一九八五年十一月一〇日）。

さらに、これに関連して言及しておかねばならない。それは、昭和三十八年から実施されている「全国戦没者追悼式」の対象となつている物故者は、通常の戦没者だけでなく、空襲の犠牲者や終戦時の民間人をも含めた自決者などをも含むあらゆる戦争犠牲者であり、戦争裁判受刑者の遺族も当初から毎年欠かさず招待されていることから戦犯者死没者も当然このなかに含まれているとみるべきであろう。この事実に対しては、国内的にも国際的にも何ら問題とはされていないことである（江頭等、前掲書一二〇—一二二頁）。

さて、懇談会の「国事に殉じた人々」にいわゆるA級戦犯を含めることは、たんなる危憂に終わらなかつた。早速、中国外務当局からクレームがついた。「A級戦犯のまつる靖国神社への日本内閣構式員の公式参拝については、日本政府にわが国の立場を伝え、同時に行事を慎重にするように要求した。……わが国のこの友好的勧告にもかかわらず、公式参拝が行われ、わが国民の感情を傷つけた。」というのである。

政府は、外交ルートにより経過の釈明に務めたが、中国側は「前事を忘れず、後事の師とする」を建前に譲歩しうとせず、与党自民党として、同じく刑死した板垣征四郎陸軍大将の長男である板垣正参議院議員が、東條家をはじめ刑死者六人の遺族に対し、「合祀取り下げ」の働きかけを行うことになった。まず、故東條英機元首相の次男東條輝雄氏に打診をするのであるが、その際の模様がジャーナリスト伊藤達男によって雑誌「諸君」昭和六十二年一月号に

「東條家の言い分」と題し掲載された。輝雄氏は、この板垣参議院議員の「合祀取り下げ」の申し出に対し反論するのであるが、この反論に対し、同誌次号で評論家の俵孝太郎が「東條家の言い分」は間違っている」と反論、その俵に対し、小田村元行政管理庁事務次官が再反論、さらに、この両者による反論、再反論が繰り返され、さらに、村上兵衛 山本七平らの評論家もこれに参加、さては、国際法学者大沼保昭ら五人の学者による東京裁判シムボジウムで、この裁判の果した役割が論ぜられ、そして、十月号で巢鴨プリズンで教誨師を務めた花山信勝師によって東條英機の「信仰」が紹介されるなど、輝雄氏の「合祀取り下げ」反対をめぐっての賛否論が延々と続けられたのである。

東條がプリズンに面会に来る家族に、繰り返しいい渡したことは、「絶対に言い訳をするな。」であった。にもかかわらず、輝雄氏は、なぜそんなに頑強に「合祀取り下げ」に反対したのであるうか。「いわゆる戦犯というのは、(東京裁判で)一命を賭して反論をし、そして生涯を終わった人でしょう。」「ただ、結果的に合祀されたという事実は、いわゆるA級戦犯の人たちは、少なくとも犯罪人じゃありませんよ、戦没者でしたということが認められたということにはかならないわけです。そういう意味から言えば、東京裁判の被告があれだけ(法廷で)主張したことが、ともかく理解はされた。この点に関して、遺族としては神社に感謝をしこそすれ、神社に対して何か反論するとか、処置が誤っているから取り下げてくれと何らかの申し出をする理由はぜんぜんありません。」そういうえば、法廷での陳述が終ったあと面会に来た勝子夫人に東條が「自分も戦死者の列に加わることができ得であろう。」と語ったといわれるが(同誌三月号)、輝雄氏のこの答えのなかに、二つのことが感じとれる。一つは、輝雄氏には、東京裁判が、いまだ戦争状態継続中(講和以前)の、しかも勝者による裁きであったという認識がいかに熾烈であったかということ、そして、その間、東條家の遺族は、いかに非難轟々のなかで毎日を過ごしてきたか、ということである。そうしたなかで、東條が個人弁護の口供陳述において、あくまでも国家弁護に徹して陳述し、神社がそれを評価したものを、今更

の思いで「合祀取下げ」に反対したのであろう。しかし、東條の陳述に問題がないわけではなかった。以下「極東国際軍事裁判速記録（第八卷）」によりつつ検討する。

三

東條が、個人弁護のためにこの法廷に提出した東條英機口供書は、彼が第二次近衛内閣の陸軍大臣として入閣した昭和十五年七月二十二日から同十九年七月十八日、東條内閣が総辞職するまでの政治・軍事動行についてである。日本字タイプライターで二二〇枚に及ぶ彪大なもので彼の弁護人清瀬一郎と米国人弁護士ブルーエツトが、法廷でそれを読み上げるのに三日間を要した。七項目の冒頭陳述書と一五六項目に及ぶ宣誓口供書である。

昭和二十一年五月三日、東京裁判が開廷、罪状認否、裁判所の管轄権をめぐる法律論争が行われ、檢察側の冒頭論告が始まったのが六月に入ってからであつた。その頃になると東條は、自分の出番に備えて口供書案作りを始めたのであろう。佐藤早苗「東條英機 封印された真実」によると、七月中には、元秘書官赤松貞雄、井本熊男らと資料の請求などを含め書簡の交換が頻繁に行われている。こうして、でき上がった口供書は、彼の抜群の記憶力と緻密な証拠資料の収集によって練り上げたものであろう。

さて、法廷では、まず清瀬弁護士が、「東條は、この期間における政治的、行政的の責任については回避するものではないが、ただ、その事の刑事上の責任の有無については、貴裁判所の御判断を待つ」に始まる冒頭陳述を読み上げる。七項目は、次の通りである。

- 一 日本は予め、米、英、蘭に対する戦争を計画し準備したものではないこと
- 二 対米、英、蘭の戦争は此等の国々の挑発に原因し、我が国としては、自存自衛の爲め真に止むを得ず開始せら

れたものである

三 日本政府は、合法的開戦通告を攻撃開始前に米国に交付するため周到なる注意を以て手順を整えたこと

四 大東亞政策への真意義

五 いわゆる「軍閥」の不存在

六 統帥権の独立と連絡会議及び御前会議の運用

七 東條の行いたる軍政の特質は、統括と紀律に在ったこと

清瀬弁護人は、この順序に従って読み上げ、最後に「東條弁護の部門に於ては、東條自身が証人として供述をいたします外には、証人の訊問はありません。」と結んで冒頭陳述を終った。東條独りが証人になるということは、東條がこの裁判にかける意気込みと自信によるものであろうが、それとともに統帥に関すること、海軍については総理として知り得たこと以外は不知で通す法廷戦術であらうか。

続いて東條が証人台に立ち、ブルーエット弁護人が一五六項目にわたる供述書を十二月二十六日、二十九日、三十日と三日がかりで朗読した。この口供書の最後は、こう結ばれている。「終りに臨み——恐らくこれが法廷の規則の上に於て許される最後の機会でありませうが——私は茲に重て申上げます。日本帝国の国策乃至は当年合法に其地位に在った官吏の採った方針は、侵略でも搾取でもありませんでした。……戦争が国際法上より見て正しい戦争であったか否かの問題と、敗戦の責任如何との問題とは、明白に分別の出来る二つの異なった問題であります。第一の問題は外国との問題であり且法律的性質の問題であります。私は最後まで此の戦争は自衛戦であり、現在証認せられたる国際法には違反せぬ戦争なりと主張します。……第二の問題、即ち敗戦の責任については当時の総理大臣たりし私の責任であります。この意味に於ける責任は私は之を受諾するのみならず衷心より、進んで之を負荷せんことを希望する

ものであります。

昭和二十二年（一九四七年）十二月十九日 於東京、市ヶ谷 供述者 東條英機

口供書の朗読が終るとブルーエットを始め各被告の弁護人の直接訊問が始まる。東條から各被告に有利な証言を得るためである。そして、最後に立ったのが、木戸被告のローガン弁護人である。ローガンの訊問は執拗であり、かつ、ひねった質問をするので裁判官や検察官も口をはさんだりして翌三十一日までかかった。そして最後に、

○ローガン弁護人 天皇の平和に対する御希望に反して、木戸候が何か行動をとったか。あるいは何か進言をしたという事例を、一つでもおぼえておられますか。

○東條証人 そういう事例は、もちろんありません。私の知る限りにおいては、ありません。のみならず、日本国の臣民が、陛下の御意思に反してかれこれいうことはあり得ぬことであります。いわんや、日本の高官においておや。

この答弁を得てローガンは、訊問を終るのであるが、すると、すかさず

○裁判長 あなたとしては、これから起るところのいろいろなこまかな意味合いをよくわかっておると思います。（モニター これからというのは、ただ今の回答がどういうことを示唆するということがわかるでしょうね）

ローガンの訊問の主旨は、木戸の言動は、すべて天皇の意思ではないかということを裏返しにして質問したのであるが、東條のこの答弁だと開戦責任も残虐行為もすべて天皇の意思だった、ということになる。東條は、ローガンの訴術にまんまと嵌まったのである。現にソ連のゴルンスキー検事は、「天皇を訴追する十分な根拠が発見できた」とキーナン主席検事に進言している。

東條は、後程（一月六日）、この答弁に対する完璧な訂正の答弁をしているので東京裁判に係る解説書を読んでみてこの部分には、触れているものと触れていないものがある。また、触れたとしても、キーナン検事と検察側の証人となった田中隆吉（陸軍少将）とが大晦日の晩であるにもかかわらず元宮内大臣松平恒雄邸を訪問するなど駆けず

り廻り、木戸幸一の息子であり、弁護人をも務める木戸孝彦を介して、事の重大性に未だ気の付いていない東條を説得して改正の了解を得るまでの事件性についてである。しかし、口供書で、君臨すれども統治しない旧憲法下におけるその運用実態を縷々論述し、「開戦の決定も亦内閣各員及統帥部の者の責任であり、絶対に陛下の御責任ではない。」と明言している東條が、ローガン弁護人の誘導のうまさがあったにしても、なぜ、このような失言をしたのであろうか。この点は、後に検討する。

さて、弁護人の直接訊問が終ると、いよいよ檢察側の反対尋問である。質問者は、もちろんキーンナン主席檢察官である。この東條に対する反対訊問は、年明けの一月一日だけ休廷して一月六日まで続くのであるが、弁護人木戸孝彦とキーンナン檢察官とのさきの東條の答弁訂正の約束の期限は、一月五日である。従って、すでにマックアーサーは、天皇訴追せずの方針を固め、その意を体しているキーンナン檢察官の心は焦燥のなかにあった。東條に対する檢察側反対訊問は、「被告東條、私はあなたに対して大將とは申しません。それはあなたも知っておる通り、日本にはすでに陸軍はないのであります。」という侮辱的な言葉で始まった。こうして、実質四日間にあたる、いわゆるキーンナン・東條の一騎打ちが展開されたのである。

ところで、木戸孝彦からキーンナン檢察官のもとに「東條訂正了解」の報が届いたのは、一月六日の朝であった。訊問中のキーンナンは早速質問の舵をそちらの方向に切る。

○キーンナン檢察官 さて一九四一年すなわち昭和十六年の十二月当時において、戦争を遂行するという問題に関しまして、日本天皇の立場及びあなた自身の立場の問題、この二人の立場の關係の問題、あなたはすでに法廷に対して、日本天皇は平和を愛する人であるということを、前もってあなた方に知らしめてあったということを申しました。これは正しいですね。

○東條証人 もちろん正しいです

○キーンン檢察官 そうしてまたさらに二、三日前にあなたは、日本臣民たるものは何人たりとも、天皇の命令に従わないようなことを考えるものは、ないということを言いましたが、それも正しいですか。

○東條証人 それは私の国民としての感情を申し上げておったのです。責任問題とは別です。

○キーンン檢察官 しかしあなたは實際合衆国、英国及びオランダに対して戦争をしたではありませんか。

○東條証人 私の内閣において戦争を決意しました。

○キーンン檢察官 その戦争を行わなければならないというのは——行えというのは裕人天皇の意思でありましたか。

○東條証人 意思と反したかも知れませんがとにかく私の進言——統帥部その他責任者の進言によって、しぶしぶ御同意になったというのが事実でしょう。しかし平和の御愛好の御精神は、最後の一瞬に至るまで陛下は御希望をもっておられました。なお戦争になってからもしかりです。その御意思の明確になっておりますのは、昭和十六年十二月八日の御詔勅の中に、明確にその文句が附加えられております。しかもそれは陛下の御希望によって、政府の責任において入れた言葉です。それはまことにやむを得ざるものとなり、朕が意思にあらざるなりというふうな御意味の御言葉があります。

まさしく、心憎いばかりの百点満点の答弁である。しかし、キーンン檢察官は、それを確認するかのような訊問を続ける。

○キーンン檢察官 あなたは開戦前に北米合衆国及びその他の西欧諸国に対して、開戦の通告を事前に送ることを、数回に互って天皇より慫慂されたものではありませんか。

○東條証人 天皇からのご注意（傍点筆者）になったことはその通り。しかし私はたび／＼連絡會議の構成員には申

しておきました。私の責任において。

○キーンナン検察官 それは天皇の命令という形でありましたか。

○東條証人 命令じゃありません。御注意です。私の責任においてそれを実行したのです。

この件についてはもうこれ位でよいであろう。くだいといわんばかりである。そして東條に対する検察側反対訊問は、次のような問答を以て終るのである。

○キーンナン検察側 あなたは、この戦争をひき起こしたことを法的ないしは道徳的に間違ったことをした覚えはないと言っているが、そう了解してよいか。

○東條証人 間違ったことはないと思う。正しいことを実行したと思う。

○キーンナン検察側 それではもし本審理において無罪放免となった場合には、再びあなたの同僚と共々連れ立って、そうして同じようなことを平気で繰り返す用意があるというのですね。

このキーンナン検察官の検察側反対訊問の結論は、一見捨科白的なように見えるが、キーンナンとしては、とにかく東條が冒頭陳述から、宣誓口述、そして反対訊問まで、一貫して国家弁論を貫き、一九二八年の不戦条約の、自衛戦争は認める、その自衛の解釈は、当該国の解釈による、との合意による観点に立って終始対応し、たとえ犯罪人として処刑されても、それは殉教者として国民に惜しまれ、賛美され、やがて報復が行われるかも知れないとの懸念も何程か含まれていたことも事実であろう。また、この裁判開廷以来、欠かさず傍聴を続けた富士信夫が、「カミソリ東條未だ衰えず」（私の見た東京裁判 下、一四一頁）と評したのも、輝雄氏が、「いわゆる（A級）戦犯というのは、一命を賭して反論をし、そして生涯を終った（処刑された）人でしょう。」と反論したのも、東條が、一貫して自衛権という観点に立って国家弁論に徹して証人としての責務を果たしたことを指すのであろう。

さらに、三月三日から始まった弁護側最終弁論でもブルーエット弁護人によって東條弁論が行われたが、やはり国家弁護で貫かれており、重光（元外相）被告は、「死を前にして戦う勇者の風あり」と評した。

ここで、先年の大晦日の日の「日本国の臣民が、陛下の御意思に反してかれこれすることはあり得ない。いわんや日本の高官においておや」の失言をめぐって、東條の天皇観について検討する。

「東條内閣総理大臣機密記録」の結尾に「東條英機大將言行録」（同書、四七五頁以下）が付されている。日記風に東條が折りにふれて秘書官らに語った言行録であるが、編者が解題で、それを以下の九つにまとめている。一 天皇は神格、自分は人格、そして自分の役割は「天皇の徳を広く国民、そして大東亜共栄圏に光被させること」天皇への絶えざる内奏、宮中での閣議や統帥部の会議等はその現れである。二 仕事は計画的で大綱・重点を把握し、タイミングをはかり、最終的に決断したら動かさないこと。三 法に拘り、杓子定規に守ろうとするな。西洋の疑に対して東洋の信 四 絶えざる努力の強調 五 「思いやり」の強調 六 対外的には、おおむね大東亜の範囲が意識され、それ以外には、具体イメージがない。七 当面の課題として「戦争に勝たなければならない。」しかし、その具体的イメージは語らない。八 その勝利の最大の条件は、国民および東亜の団結 九 革新性。その具体例として秦の始皇帝の焚書が挙げられる。

このうち天皇観にかかる部分をもう少し具体的に引用する。

「お上より日米交渉の件は白紙にかへして再検討せよと仰せられ其の通り実行したが、どうしても此際戦争に突入しなければならぬとの結論に達し、お上に御許しを願ったが仲々お許しがなく、漸く已むを得ないと仰せられた時、ほんとにお上は真から平和を愛し大事にしておられることを知った。……戦争をしなければならぬ様にしむけた米国がにくらしくなった。宣戦の大詔に豈朕が志ならんやとお上が特に仰せられて挿入した文句である。」（昭

和十六年十二月一日、談）

◎御上の御聖徳

常々云つてゐることだが、御上は神格でいられる。御下問があつて、存じませんが調べまして申し上げますと申し上げると、決して追及はされぬ。いやしくもごまかそう等、苟且にも思つては決していけない。有の俣を申し上げねばならぬ。何事も鏡の如く御存じであられる。

◎補弼の大任にある大臣は努めて御上の御神格に触れることが肝要である。本日も文部大臣に命じて留日学生の処遇等に関し上奏をする様に指示された。

（注）各大臣に対し総理はよく○○大臣は○○の件で秦上せよとの御注意あり。（昭和十八年九月十日）

一 それから御親政の事に關聯して

「自分は補弼の責任は、良いことがあれば、それは凡て御上の御徳に帰すべきもの、悪いことがあれば、それは凡て大臣の補弼の責任なりと思つてゐる。誰も此の様なことを憲法学者は云はないがね。……御親政をはき違へてゐる者があるが、補弼の責任は以上の如きものと考へる。かくして何千年來皇室に対する民草の尊敬があり、御徳政があり、皇室は御安泰である。

憲法（天皇は神聖にして侵すべからず）を解して、学者は天皇には何ら責任はないと論じてゐる。然し自分は大東亜戦争開戦前の御決断に至る間の御上の御心持ちを拝察して、天皇は皇祖皇宗に対し奉り大きな御責任を痛感せられて居る御模様を拝承した。然るに臣下たる我々は、大東亜戦争に勝てるかどうかと云ふ事のみを考へたのであるが、御上はそれとは較べものにならぬ大きな御責任のもとで御決断になったものと思ふ。之は開戦一ヶ月余に拝察し体験から云つたことである。（昭和十九年十二月二十八日）

一——天皇御親政の姿——

本日二一〇閣僚交迭に関する人事を内奏された時、今後閣議は宮中で開催致し、場合により御親臨を仰ぎたいと存じ、宮内大臣（松平恒雄）にも早速相談致したいと申し上げたる処、御上には総理の奏上の終らざるに、御言葉あり。

（御上は総理奏上の際には、必ず全部の言上の終了后、御言葉を賜はるを例とするものにして、今回の如きは始めての事なり）——「昔は、宮中で閣議を開催してゐいたが政党内閣内閣から総理宮邸で開催することになったと思ふ」との御言葉あり——。

今回の措置を大變御喜びの御模様に拝察したと総理からお話しあり。

（注）閣議を宮中で開催するの件は総理の持論であつて、今回の内閣改造の機に断行を決心されたのである。依つて二十一日午前一〇四〇総理は宮中官邸に松平宮大臣を訪問し、委細打合せをなし、二十二日（火）閣議の際総理より今回の内閣改造及参謀長親補（杉山元↓東條英機）等に関連して新しい決意を發言された。（昭和十九年二月二十九日）

（以下省略）

次に記述が公正であるとの評価のある保坂正康「東條英機と天皇の時代 下、文春文庫」から、その言行を拾つてみる。「私は赤子の代表として、天皇のお考えをすべての国民の一人ひとりに伝えるのが役目」（二六六頁）、「総理の指示権、命令権等による超重点主義生産増強行政は、総理の独裁化だ」といわれて、「自分は「陛下のご命令で内閣総理大臣という重職に御任命になつてゐる。……私一個の東條というものは草芥の臣で、東條そのものはあなた方と一つも変りはしない。」（七九頁）陸軍大臣と参謀総長の兼務に関連して「ヒットラー總統は、兵卒出身、自分は大将であ

る。一緒にされては困る。」（一三三頁）さらに杉山参謀総長が不同意で、総長が単独上奏する話がでると「陛下は私の心持ちをすでにご存知です。総長が単独上奏すれば、私は私の考えを覆さなければならない。」（一三三頁）、「自分は辞めるわけにはいかぬ。陛下の御信任がある限り辞められぬ。」（一五三頁）「東條を倒せば敗戦につながり、そうなれば敗戦の責任はあなたがたにある。」（一六六頁）

これらで見る限り、東條の忠誠心の構造は、神格者天皇との地位、（合議体の場合は）場所との距離であり、高官になる程、天皇との精神的紐帯が強くなる。そして、その地位に従ってそれを国民に伝える責任がある。

次に、東條に大命降下以降の彼の行動を追ってみよう。九月六日御前会議で決定した、一 戦争の決意 二 対米交渉の継続、三 十月上旬頃までに交渉が纏らないばあいは開戦の決意という内容の「帝国国策要領」を白紙還元しての主戦論者といわれた東條への大命降下である。しかも、この白紙還元は、天皇の意思も含まれている。東條の忠誠心が試される絶対絶命の場面である。総理になった東條は、陸軍大臣と内務大臣を兼ねた。内務大臣を兼ねた理由は、もし交渉が何らかの交渉により妥結した場合、国内の混乱を予想してである。その上で彼は、一週間寝ずに打開策を研究した。統帥部を説得して、米、英の援蔣ルートであった「南部仏印からの兵力即時撤退」を含む妥協案も作成され。日米交渉に当たっている野村大使支援のための来栖大使も派遣された。しかし、十一月二十六日、米国側から提示されたハルノートは、それらの努力を水泡に帰してしまった。そして十二月一日の御前会議で、交渉はあくまで続行するものの、現状では自存自衛のため開戦やむなしの決定となった。

ところが、自存自衛のための戦いというのは、どういう状態になったら戦を終えるのか。「対米英蘭戦争終末促進ニ関スル腹案」なるものも作られてはいた。しかし、その内容は、欧州で枢軸国が勝ち、こちらも勝って、といういわば願望案のような、いわば作文物である。しかも、海軍は、二年間ほとも角、それ以降は保障できないという。重油

が足りないのである。そのような中で、十二月八日、米、英に対する宣戦となった。オランダに宣戦しなかったのは、蘭印の石油をめぐって平和交渉の余地を残しておく思慮からであつたが、同日、逆にオランダから宣戦布告して来た。

これより先、東條は、宣戦の大詔案の作成を命じていたが、交渉妥結の場合と二通りの案を作らしていた。(機密記録、四七九頁)

さて、序戦の花々しい戦果とシンガポール陥落も間近かという時期に、天皇は東條に対し、「戦争の終結につき機会を失せざる様充分考慮し居ることと思うが、人類平和の爲にも徒らに戦争の長びきて惨害の拡大し行くは好ましからず。……南方の資源獲得処理についても中途にして能く其の成果を挙げ得ない様でも困るが、それ等を充分考慮して遺漏のない対策を講ずるようにせよ。」(木戸幸一日記、下巻、九四五頁)と注意を喚起した。その年の八月、来栖が交換船で帰朝、総理大臣の午餐会のあと、東條と杉山参謀総長とから別室に呼ばれて「今度はいかにしてこの戦争を早く終結し得るかを考えてくれ。」と依頼され、来栖は一驚したという(来栖三郎 泡沫の三十五年、一六七—一六八頁)。これらでみる限り、東條は、限られた条件の中ではあるが、見せかけの白紙還元でなく天皇の平和愛好の精神に誠実に答えようと努力したといつてよい。ただし、来栖への依頼の結末がどうなったのかは分からない。ところが、戦局が厳しくなるにつれ、このスタンスが崩れ始めるのである。

昭和十九年七月二日、参謀本部第二十班の松谷大佐以下の三名で、昭和二十年春を目途とする戦争指導に関する研究結果をまとめた。「今後帝国は、作戦的に大勢挽回の目途なく、ドイツの様相も概ね帝国と同じく今後シリ貧に陥るべきをもって、速かに、戦争終結を企図するを可とする。」という参謀本部の公式見解とするには画期的な内容であり、上司の第一部長は、趣旨は同意するが印刷は不可。ついで秦次長は、事の重大性にかんがみ、上や外部には提出する

な、とのことだったが、松谷大佐はこれに屈せず、高級次長及び参謀総長（東條陸軍大臣が兼務）にそれぞれ口頭で説明したが東條は苦い顔で無言であった。この案には、海軍部内および重臣層においてもそのような空気であることが附記されていた。その翌日、突如、松谷大佐は、支那派遣軍参謀として転任発令された。氣に入らぬ者は、第一線に飛ばす。東條一流のやり方である（種村佐孝 大本営機密日誌 二〇七、二〇八頁）。この時期は、東條を失脚さすべく重臣達の動きが活発化していたし、一方、太平洋で敗け戦が続いている中、参謀本部で承認を渋っていたインパール作戦がやっと承認されインド国民軍を伴ってインドに向って動き始めた時機でもあり、この作戦が成功すれば印度独立も夢ではなかった。東條の頭の中はどちらのウェイトが大きかったのだろうか。重臣にも賛成者がいると松谷大佐はいった。また悪い時に悪いことをいったものである。

ところで東條内閣は、七月十八日、サイパン陥落を契機に総辞職し、東條は、何の肩書きもない重臣となる。次の小磯内閣は、短命で、昭和二十年四月五日、一年を経ずして総辞職した。そして、次の首相選考のための重臣会議が、その日の夕方開かれた。東條も重臣の一人として出席した。ここでは、東條の和平に関係があると思われる発言のみを抄出する。

一 東條 今国内では、最後まで戦って国の将来を開くべしとする説と無条件降伏をも甘受して早急に和平を作り出すべしとの論あり、先づ、これを先決する要あり。

一 岡田 戦争継続か和平かなどということは、もつと先に行かなければ判断できない。これらのことを充分研究にうえ、後継を決めねばならない。

一 東條 国内が戦場になろうとしている現在、余程注意されないと陸軍がそっぽを向くおそれがある。

一 木戸 今日では反軍的な空気も相当強い。国民がそっぽを向くと云うこともあり得る。

一 岡田 この重大時局大困難に当り、いやしくも大命を排した者に対し、そつぽを向くとは何事か。国土防衛は誰の責任か。陸海軍の責任ではないか。（木戸前出、一一八頁—一一九四頁）

さらに、東條は、別の機会に部内に訓示し「勤王には狹義と広義の二種がある。狹義には君命にこれ従い。和平せよとの勅命があれば直ちに従う。広義は国家永遠のことを考え、たとえ勅命があつても、まず練め、度々練言して聴許さねば、陛下を強制しても所信を断行する。私は後者をとる。」（加瀬俊一「日米戦争は回避できた」四六—四七頁、本書からの孫引であるが、東條がどの場所、誰を相手にこの訓示をしたかは明らかでない。）

昭和二十年頭初から天皇は、戦争の終結をも含め、軍部にも内閣にも内密裡に各重臣から個別に戦局の見透しにつき意見を聴取された。

二月七日、平沼騏一郎に始まり、同月二十六日東條英機に至るまで計七人である。そのうち、一日も早い終結の方途を構すべきとの意見を述べたのは、近衛のみであり、樂觀論のもとに断乎戦争継続主張を唱えたのは、東條のみであった。他の重臣は、抽象論か曖昧な意見であった。東條の意見で注目すべきはその結論である。「然らば如何にすべきや。第一に肝要なることは政戦両略ともに陛下御親政、御親裁の下にあることは明瞭に顕現することなり。東條在職中にも申せし如く、このことは形の上に直ちにわかるようにするを要す。……在職当時、これを実行せしも今は旧に返りたり。次に枢密院、元帥府が眠つていてはならぬ。陸海軍もまた渾然一体なるべし。（以下略）」その場に侍立した藤田侍従はその感想を次のように述べている。

「遠慮のない発言には好意をもったけれど、私の聞いた感じでは、自分が内閣首班で行つて来た施策を、現内閣が改変し、逆に国民の戦意を衰えさせているといったふうの独善が感じられた。和平に対しては真つ向から敗戦主義であると罵倒したが、その戦局判断の甘さとともに、これは後世史家の批判を受ける点であろう。東條大將は、陛

下の御心が何を求めておられたかを看取していなかったのではなかったのか。」（藤田尚徳 侍従長の回想、八五頁）

いまや、東條は、総理大臣をはじめ、一切の官職を離れ（もつとも東條は、陸軍大臣の位だけは、座れるものなら座っていたかもしれないが、当時の参謀総長就任予定者梅津美治郎から留任は適当ならず、と引導を渡された。）いわば自由の身である。「天皇からの距離」がかくいわたのであろうか。それにしても、これまでの言動とその落差が大きすぎる。ここから、その気にさえなれば「東條悪玉論」を導き出すことも可能である。しかも、彼は、あともう一度変節とも思われる言動をするのである。それは、それとしてここでは、しばらく東條の天皇観の構造を検討する。

この作業を進めるに当たって、筒井清忠の超国家主義者の天皇観の分析——二・二六事件の際の——は示唆的である。筒井の所説によると、東條と立場は異なるが皇道派の将校たちの天皇観は、三つに分類される。まず、彼らは秩序のシンボルであった天皇を変革（この場合は戦争）のシンボルとすることによって、その意味転換を行う。その場合、「変革のシンボル」として「理想（この場合は神格）」としての天皇」と「現実の天皇」との位置の評定が問題となる。それは、まず大きく二つに分類される。一つは「理想としての天皇」と「現実の天皇」との乖離に全然気がつかない、つまり乖離が明らかになった場合「承諾必謹」で後者に従うもので、二・二六事件の青年将校のかんりの部分がこれである。いま一つは、両者の乖離が明らかになったとき、後者が前者に従うべしとするもので、二・二六事件の中核者であった磯部浅一らがそれである。永田事件の相沢三郎中佐などもこれにあたる。そして、これは、さらに磯部型と相沢型の二つに細分される。

まず、前者であるが、一君万民、万世不易の天皇を蔽っている暗雲——奸臣——を払えば自然と一君万民の「国体の真姿」が顕現するというオプティミスティックな天皇観であり、「理念としての天皇」と「現実の天皇」との乖離は

考えられない。従つて、退去を命ぜられれば、天皇の命令「奉勅命令」として易々としてこれに應ずることになる。

三つの目は「理念としての天皇」に「現実の天皇」を規定しようとするタイプである。「人間としての天皇はお許しにならないかも知れないが、神たる天皇はお許しになります。」という論理である。しかし、これは裏を返せば、自己が最高権力者たる天皇を規定することであり、自己の絶対優位を主張する一種の個人主義であろうと筒井は分析する（筒井清忠 昭和期日本の構造、三五〇—三五六頁）。この論理を東條の場合にあてはめてみるとどのようなになるだろうか。

まず、松谷大佐の左遷の場合である。しかしこれは、たまたま東條を追落そうとする重臣の動きと、大佐が重臣の中にも和平論者がいるといったことが二重写しになって東條の逆鱗にふれ、松谷大佐が割りを喰つただけのことであろう。また、かりに宮中にもそういう動きがあったとしても直接天皇とは関係はない。

次に、ポスト小磯の後継者を詮議する重臣会議における「陸軍そつぽ」論と加瀬が引用する「二つの勤王」論である。後者は、明らかに筒井の分類による第三の型、即ち、「現実の天皇」を「理想の天皇」で規定しようとするものである。しかも時間的にこの訓示が先で「陸軍そつぽ」論が後だとすると、訓示でアジつた効果が「陸軍そつぽ」論となったことになる。しかし、重臣会議の席で反東條の急先鋒の岡田に「いやしくも大命を拝した者に、そつぽを向くとは何事か」とたしなめられて「懸念があるので、ご注意ください」に止まっていた、何ら行動は伴っていない。

最後の重臣の戦局に対する東條の意見具申はどうであろうか。今の戦局は、五分五分、国民生活もフィンランドやドイツに比してまだまし、この時点で和平を考えるのは、敵の宣伝に乗った敗戦思想である。今後の戦局に対応するには政戦両略とも陛下の御親政、御裁にある。かつて自分がやったように統帥も閣議も宮中で備すべし、これを改変したから逆に国民の戦意が衰えた。とする東條の見解は、眼前におられる「現実の天皇」は神格であり、「理想の天皇」

で規定すべしということになるが、「現実の天皇」と「理想の天皇」との乖離はない。その規定の態様は御親政である。しかし、御親政といっても天皇が、すべて専制君主的に行動するわけではなく、憲法に従って上奏や勅許の頻度の問題であろう。しかも「陛下は私の心持ちはよくご存知」という自負があるとすると、これは、筒井のいう自己の絶対優位の主張となり、藤田侍従いみじくも感想でいったように独善に他ならなくなる。

ところが、八月六日以降、情勢は一変する。広島、長崎への原爆投下であり、ソ連の参戦である。政府八月九日から十日午前二時にわたる御前会議を開き、陛下のご聖断でポツダム宣言受諾を決定した。東條の理想とする御親政である。原因は、原爆という大量殺戮兵器の使用とソ連参戦である。十日午後の重臣会議で東條は、当然ポツダム宣言受諾には反対であったが、「自分には意見はありますが、ご聖断がありたる以上、やむを得ないと考えます。」と答えた。十四日、再び御前会議を開かれ、ポツダム宣言受諾の聖断が下り、詔書の文案や国民に玉音放送するための録音盤づくりが検討された。そして十四日夜にこの玉音放送用録音盤奪取計画が近衛師団にあった。近衛師団には師団参謀として娘婿の古賀秀正大尉がいる。東條は師団司令部で古賀に会い「承詔必謹」をくどいように説いた。古賀も了承した。しかし結果は、空しかったが……。

東條の理想は、神格としての天皇の御親政、しかし、現実には立憲君主としての天皇、その上に「言行録」にもあったように法の軽視——東條は、日本の法律は「法三章」でよいともいつていた——が、周到的準備にもかかわらず、ローガン弁護人のひねつた質問に乗せられて、いわば本音を吐いてしまった、ということではなからうか。

東條の天皇観に時間を取り過ぎたようである。裁判は、四月十六日、一切の弁論を終り、結審し、十一月四日の判決言い渡まで休廷となった。

四

判決言い渡し日、荒木被告担当の菅原裕弁護士は、弁護人席で宣告を受ける被告達の態度を観察していた。以下では、その観察記である。東條に係る部分を引用する。

身を軍籍に置いていた者として、最後をとり乱したくない、笑われたくないとい心がけるのは、武士のたしなみとして当然である。しかし、その緊張が外から見ているとかえって固くなったように見えぬでもなかった。また、文明の名をかたる連合国の無法裁判を憫笑する気概も見識も失っているように見受けられた者もあった。ところが東條被告においてはこれが全然反対で、東條試験官が、ウエップという受験生の答を聞いてやるような態度で、顔は微笑しているようでもあり微笑していないようでもあった。……全く私はこの時の東條氏への顔を見て、アアこれは立派に解脱したなと感じたくらい悟りましたものであった。ウエップ裁判長の絞首刑の宣告をきき終るや二度軽くうなづき「死刑か、よし、よし、わかった、わかった」というような表情をした。著者はこの東條被告の神々しい一瞬の光景を見て、東京裁判も立派な終幕を告げることができたと胸をなでおろした（清瀬一郎 前掲 一七六頁―一七八頁）。

法廷が結審し、判決を待つまでの間、東條らいわゆるA級戦犯には、教誨師花山信勝師に出会う因縁があった。花山が巢鴨ブリズンの教誨師となったのは、偶然といえば、偶然であったが、教誨師を引き受けるに当たって、彼には敗戦国日本を見つめてのひとつの決意があった。

江戸時代の一部神道および国学者たちの思想が、ついに明治の王政復古の大維新を成就せしめながら、万世一貫不易の「法」の尊奉を忌避し、もつて今日世界をして、軍国主義、侵略主義と呼ばしめるがごとき現代日本へ導い

たことは、かえすがえすも遺憾のきわめである。

もちろん、そこに仏者の無氣力、無反省が重大な原因として、他を難ずるよりも、まず内に深く省みる必要のあることは、いうまでもない。

明治以来、仏者自らの力およびざりし結果が、神道のあるべき姿を変じて侵略主義軍国主義とみられるものへすすませるにいたったときえ、深く反省して、慙愧しなければならぬのである。

さらに、巢鴨プリズンに通うようになってからも戦犯人と呼ばれる人びとに会い、なかには刑場に赴く人を送るにつけ次のように実感せざるを得なかった。これも長くなるがそのまま引用しよう。

国民は、現在の自己の生活を苦難から、これらの戦争犯罪人として法廷に曳かれてゆく人たちを冷笑し、この国家の危機にさいし、かえって利権獲得を目ざし内部訌争をほしいままにすることがあつては、もつてのほかである。また、法廷に曳かれた責任者も亦、真に「法」を敬って指導した人物であるならば、堂々とその主張をのべて、真に人類「平和」のために道を開拓すべきである。

たとえ、個人として不法を行わなかったという信念に立つ人であっても、世界の人類をしてかかる戦争に導き、無辜の民草の多くの生命を失わしめるにいたった責任を感じずるならば、いさぎよく、その有限の身命財をすてて、無限の身命財に生きる道があらう。

永遠につづく歴史は、その人の真善美を無限につたえて、万世不朽に消えぬ栄光としてかがやくにちがいない。――

花山は、巢鴨プリズンに収容されているBC級の死刑犯に対し、教誨した。彼らの一様に語るとは「戦争のときは、死ぬことを何とも思わなかったんですが――」であつた。しかし、その中ですでに刑場に送った者は、何れも安

らかな最後を遂げて逝った。

昭和二十三年八月七日、いわゆるA級戦犯に特別講義をする機会が訪れた。法話が終ってから、東條から、吉川英治の「親鸞」を読みたいので、と所望され、その後差入れたところ、それが返却されて来たのをみると十五人にも回覧されており、十五人の署名がされていた。

十一月四日、判決文朗読が始まり、同月十二日、刑の言渡しが行われてからは、絞首刑確定者のみ各四回個別に面談した。ここでは東條の場合のみを考察する。

花山の言によると「真宗の「正信偈」にしても、「教行信証」にしても、「大無量寿経」にしても、あれだけ熱心に読んだ人っていうのを私は知らない。」（諸君、一九八七年一〇月号、東條英機の「信仰」というように、四回の面接の内容は、仏教のことと遺言の口述に尽きていたといつてよい。まず、仏教に関して、本稿と関係のあると思われる部分について述べると、「大無量寿経」を拝誦していると、浄土の各菩薩の莊嚴なことを地上の帝王に比較しておられるが、全くそうだと思う。失礼な話だが、地上の「帝王」の如きは、実にちつぽけなものだと考えます。これは、花山が奈良の大仏について「大毘盧舎那仏」の意味から説きおこし、このような深い思想と哲学を背景と世界観から造られた仏様だから、聖武天皇も光明皇后も、孝謙天皇も「三宝の奴」としてその前に額られた。との説明に答えたもので、もちろん天皇に対する心変わりなどではない。後でまた述べるが東條の十二項目からなる最後の遺書のなかでも「陛下の位置について、その存在形式については言はぬが、御存在そのものは絶対必要である。それは私だけでなく多くの者は同感と思う。……」と述べている（この当時は、日本国憲法が制定され、憲法論議が盛んな頃で、天皇制反対の議論もあることを東條は、新聞で知っていたのであろう。）

ところで、東條は、遺言を三回書いている。一回はピストル自殺を試みる前、二回目は、第一回面接の十一月十八

日、東條は、遺言要をメモ書きし、それを東條が口述し、花山が四項目に文章化した。ところが、全被告の弁護人が米国大審院に上告し、受理された。審査の結果全部却下されたのであるが、そのために刑の執行が四十日余延ばされた。そこで東條は花山が四項に纏めたもの追加、加筆などして十二項目になったこれを第三回の遺言として十二月二十二日、最後面接の際、東條が読み、花山が筆記したものである。

さて、冒頭の雑誌「諸君」の論争のテーマであつたいわゆるA級戦犯の靖国神社合祀について東條はどう考えていたのであろうか。十二項目に纏めた三回目の遺言では、靖国神社に関しては、第九項目に出てくる。

九 我々の処刑を機として、次の諸件の実行を願う。一、戦死者、戦傷死者、戦災死者、ソ連抑留者の遺族については、同情を以て保護を与えること。二、戦犯者、戦災者等の霊は、遺族からの申出があれば、靖国神社に祀ること。三、出征地にある戦死者の墓には保護を与えること。したがって、遺族の希望申出があれば、内地に返還すること。四、(聞き取れなかった。)五、戦犯者の家族に対しては、同情ある配慮のこと。多少現実とは認識のずれがあるが、一応、戦犯者の靖国神社の合祀はストリートには、考えていない。

東條は、勝子夫人に対し、日本で処刑されること敵であるアメリカ人に処刑されることを喜び、「自分も戦死者の列に加わることができるであろう。」と語ったといわれる。(諸君、一九八七年三月号)。誤解のないように、この文章の前後を読んだの推測であるが、これは東條の個人弁護の証人を六日間にあたり一人で引き受け、国家弁護の観点からキーナン検察官とも対等に論戦し終った直後面会した際のことだと思われる。また、花山師と佐伯真光氏との「東條英機の信仰」をめぐる対談の結びの部分で、東條は、自らが靖国神社に合祀されることは「考えていないですね。」と結んでいる(諸君、一九八七年十月号)。

東條ら七人のいわゆるA級戦犯は、昭和二十三年十二月二十三日、午前〇時一分から二組に分れて処刑された。処

刑前それぞれ約一時間づつ花山と面談が許されている。東條の場合は、処刑三時間前であった。「伝言」をまじえて次のように語った。

「勝子からの二通、満喜枝、幸枝、君枝の手紙を全部花山さんから読んでいただいた。有難うと伝えていただきました。なお満喜枝の手紙にある邦正の父（長女満喜枝の夫、古賀秀正大尉、終戦の前日、八月十四日、近衛師団のクレーターの巻きぞえで自決）及び祖父を偲ぶ情、可愛しと。すでに仏心が出ているから、これをとらえてつちかうようにせよ、と。どうかよろしくお願いします。勝子へは、精神的打撃だろうが、仏の大慈悲を頂いて天寿を完うせよ。「歎異抄」の第一章は胸をつく。最後になると「称名」とこれで十分だと思う。二十三年十二月二十二日午後九時

（この章のここまでの記述は、特に出典を明示していない限りは、花山信勝、「平和の発見」を基調としている。）
刑事訴訟法の証拠方法として、死に当つての申立は、たとえそれが伝聞であっても証拠力があるとされる。東條英機の信仰については、余り知られなかった部分であり、しかもこれを東條がわれわれに残した遺産とするには、反論があろう。

現に、東條の子息、輝雄氏、敏夫氏らも東條が信仰の道に入つて行くには抵抗があつたようだが、ここでは、再び保阪正康を取り上げる。保阪は「東條のこの遺書は、へ花山へに代表される宗教世界の勝利と大日本帝国指導者の無惨な敗北を意味している。もし彼らが不動の信念をもって大日本帝国の帰趨を担つたというなら、安易に宗教的境地に達すべきではなかつたはずだ。最後の瞬間まで矜持をもって「抵抗」し、死刑の宣告を受けたとしてもたとえばつぎのようなことを叫ぶべきであつた。

へ私の刑死は、私の国家が他の国家に挑んだ理念の敗北を意味しない。これは歴史の断面における負の清算でしかない。私を裁いた君らも、いつかまた裁かれることになるだろう。私に戻つての死は、大日本帝国への冒瀆である

といえるかも知れない。」（保阪、前掲、二九〇頁―二九一頁）

そうであろうか。さきにも述べたように、東條は、遺言を三回書いた。その第一回は自決未遂前である。「英米諸国人二告グ」、「日本同胞国民諸君」、「日本青年諸君ニ告グ」の三部作である。そのうち「英米諸国人二告グ」を取上げてみよう。

今や諸君ハ勝者タリ、我邦ハ敗者タリ。此ノ深刻ナル事実ハ余国ヨリ之ヲ認ムルニ吝ナラズ。然レドモ諸君ノ勝利ハ力ノ勝利ニシテ、正理公道ノ勝利ニアラズ。余ハ今茲ニ諸君ニ向ツテソノ事実ヲ歴挙スル違アラズ。然レドモ諸君若シ虚心坦懷公平ナル眼孔ヲ以テ、最近ノ歴史的推移ヲ觀察セバ、思半ニ過グルモノアラン。我等ハ只ダ微力ヲ為ニ正理公道ヲ蹂躪セラルルニ致リタルヲ痛嘆スルノミ。如何ニ戦争ハ手段ヲ扼マズト言フモ、原子力爆彈ヲ使用シテ、無辜ノ老若男女ヲ幾万若クハ十幾万ヲ一時ニ鑿殺スルヲ敢テスルガ如キニ至リテハ、余リニモ暴逆非道ト謂ハザルヲ得ズ。

若シ這般ノ挙ニシテ底止スル所ナクンバ、世界ハ更ニ第三第四第五等ノ世界戦争ヲ惹起人類ヲ絶滅スルニ到ラザレバ止マザルベシ。

諸君須ラク一大猛省シ、自ラヲ顧ミ天地ノ大道ニ対シ愧ル所ナキヲ努メヨ（清瀬、前掲、二四頁―二五頁）

まさしく、敗軍の將、兵を語るの氣負い充滿であるが、所詮、引かれ者の小唄とみるか、彼を果しない憎悪をはらんだ殉教者たらしめるかの何れかであろう。裁く側もこれを恐れていたのであり、とくに原子爆彈の使用については、開廷五日目、清瀬弁護人の管轄権に関する動機に関連してブレイクニー弁護人が、原爆投下という空前の残虐行為を犯した国の人間にはこの法廷の被告を裁く資格がないとの主旨の爆彈発言を行ったのに対し、日本語の同時通訳が突如停止され、日本語の速記録にも記載されていない事実は、その法廷の審理への影響を恐れたとともに内心忸怩たる

ものを持っていたのでなからうか。

ところで、この「英米諸国人ニ告ぐ」に相応する部分を第三の遺書と比較してみる。東條は、刑の執行が延期されることが分かった一二月二日から数日間、第二の遺書である四項目目を詳述して十二項目とし、前述した刑執行前の面接の際に、最後の伝言した後口述し、それを花山が筆録した。相応する部分は、第一項と第十一項である。一 開戦当初の責任者として敗戦のあとをみると、実に断腸の思いがする。他の人々には関係のないことである。今回の刑死は、個人的には慰められておるが、国内的責任については死をもって贖えるものではない。しかし国際的裁判には無罪を主張した。それは今も同感である。たまたま力の前に屈服したのである。但し、国内的責任について、満足して刑死につく。

敗戦については責任を感じるが、開戦責任については、あくまで自存自衛にためであり、また、その目的は、東亜同胞の解散、共栄圏の確立にあり、侵略目的はないとする法廷での陳述は曲げていない。

ただ、東條は、十二月二日、花山と面談した際、「大無量寿経」を読んだ感想として、「人間の欲望というものは本性であつて、国家の成立ということも「欲」から成るし、「自国の存在」とか、「自衛」とかいうような、きれいな言葉でいうことも、みな国の「欲」である。それが結局、「戦争」になるのだ」(花山、前出、二七一頁)と、一見、自分の法廷での陳述と矛盾するようなことをいつているが、これは、仏書を読むうちに彼に人間の性さがというものが見えて来るようになったといわんとしたのであろう。

次にこの項で「力の前に屈服した」と抽象的に述べている原爆投下についてはどうか、第十一項にある。

十一 今回の処刑を機として、敵・味方・中立国の世界全国民罹災者の一大追悼慰霊祭を行なうことを希望する。それを以て世界平和の精神的礎石としたいことである。もちろん、日本軍人一部の間違った行為については衷心謝罪

する。しかしながら、無差別爆撃や原子爆弾の投下による悲惨な結果については、米国側に於ても大いに同情と、憐愍と、悔悟あるべきである。

この前段は、主旨はとも角、自己を殉教者の立場に置いての提言という色彩が強い。かつての戦争指導者すなわち「戦わせた側」としての東條個人として、自己の往生成仏を願うこともさることながらこれら戦争犠牲者の冥福をこそ、まず願うべきではなからうか。「忘已利他 慈悲之極」(山家学生式)である。しかし、日本軍人の一部の残虐行為について謝罪したのは、東條が初めてではなからうか。「お前もやったではないか」の理論は法廷では通用しなかったが、東條が原爆投下に対して、米軍側に悔悟を求めたのは、同じ人間の性さがとして戦争の罪悪性に立脚してのことであらう。しかし、米軍にはこの認識はまだない。

元陸軍大将東條英機は、市ヶ谷法廷閉廷と同時に死んだのであり、花山に面接してからの東條は、まだ煩惱を持ちながらも生れ変った東條英機となったと見るべきでなからうか。